様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１０日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2012
課題番号：21610010
研究課題名（和文）日本語母語児童への国語教育と非母語児童への日本語教育を言語環境から再構築する試み
研究課題名（英文）　A Study to Reconstruct Japanese Language Education for both Native- and Non-Native Japanese Children in Regard to Linguistic Environments
研究代表者
真嶋　潤子（MAJIMA JUNKO）
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号：30273733

研究成果の概要（和文）： 外国にルーツのある児童が２割を超えている、大阪のある公立小学校において、日本語と母語の両言語について、会話能力のテストと読書力（読解力、読書行動プラス読書習慣）の対話型評価を行った。また保護者には言語環境についてアンケート調査を行った。多くの中国ルーツの児童は、中国語が聞いてわかる「聴解型」か「会話型」、あるいは中国語の運用能力のほとんどない「日本語モノリンガル」になっており、2 言語で読み書きもできるのは、非常に少数であった。

研究成果の概要（英文）： We conducted the Oral proficiency test for Bilingual Children (OBC) and the Developmental Reading Assessment (DRA) in the two languages to the Culturally Linguistically Diverse (CLD) Children originated from China in a public elementary school in Osaka Prefecture. We also asked the parents of those Chinese pupils to fill in the questionnaire, asking them about the linguistic background and environment and daily activities that enhance children's language learning. It was found that many bilingual children had lost their L1 proficiency and have been left without an access to printed materials in their mother tongue, with very few pupils keeping themselves literate in both languages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１１年度	1,300,000	390,000	1,690,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：日本語教育学
科研費の分科・細目：子ども環境学　（特定期限付き募集）
キーワード：　日本語教育　母語　公立小学校　二言語評価　対話型読書力評価　OBC 中国ルーツ児童　CLD 児（Culturally Linguistically Diverse Children 文化的言語的に多様な子ども）

１．研究開始当初の背景

「こども環境学会」の目的に「こどもの成育に寄与する環境科学の確立を図り、こどものためのよりよい環境を実現するために、総合的な学術研究の推進とこども環境の形成のための実践的な事業をおこなう」とうたわ

れている。「こどもの成育に寄与する環境」と言う時、食や自然環境の問題等がまず挙げられようが、案外見落とされがちなのが、最近の外国人児童生徒の増加による日本人のこどもを取り巻く「言語環境」の変化である。自分の母語である日本語を学んでいる途中に、日本語の通じないクラスメートに出合うということは、子どもの成育にどのような影響を与えるのだろうか。

また、外国生まれや、外国人の親を持つ、日本語を母語（第一言語）としない子どもたちにとっては、日本の言語環境は大変な困難をもたらすものであるが、その実態は「言語環境」との関連で十分研究されているとは言いがたい。社会のマイノリティとして育つ外国人の子どもたちの学ぶ言語は「ここは日本だから日本語だけで良い」と言えるのだろうか。日本で育つ全ての子どもたちの健やかな全人的発達を考え、人間にとっての言語の重要性ということを考える時、日本語を母語とする子どもにとっても、日本語以外の母語を持つ子どもにとっても、日本社会における言語環境の面から「よりよい環境」というのはどんなもので、どのように形成できるのかということを考える必要性を強く感じ、本研究の重要性を確信した。

公立小学校において、日本語を母語としない外国ルーツの児童の教科学習については、言語能力に問題が多いことが指摘されつつも、日本語と母語の両言語の調査をすることが不可能な現場が多い。子どもたちが現場の教員によっても理解されないという問題は、両言語の能力がうまく測られ評価されることで大幅に改善する可能性がある。

２．研究の目的

日本語を母語としない子どもも含めた日本で成育する全ての子どもにとって「よりよい言語環境」とは何かを考えることを大目標としつつ、特に日本語非母語話者である子どもたちへの２言語（母語と日本語）教育のあり方を考えるために、大阪府下の中国ルーツの児童の２言語能力の調査を行い、彼等の育つ環境との関連を見ようとした。

３．研究の方法

中国ルーツの児童が全校生徒の２割強という集住地区の大阪府下の公立小学校において、それまでの学校との信頼関係に基づき、日本語母語児童への日本語力、中国語母語児童に対しては母語と日本語の両言語について、基礎会話、語彙テスト、聴解タスク、認知タスク、読書力を評価した。調査にはOBC会話テストと「対話型読書力評価」を使用したが、中国語については、評価ツールを作成するところから始めた。また、日本語担当教員からの聞き取りに加え、保護者への母語によるアンケート調査も行った。

４．研究成果

（１）言語能力評価ツールの開発

本研究で中国ルーツの児童の２言語能力を評価するために、日本語評価ツールはすでに開発されフィールドテストもなされた「会話力テストOBC」と「対話型読書力テスト」（中島、櫻井）を使用したが、中国語の評価ツールの開発を行った。その成果が「中国語版会話力テスト OBC-C」と「中国語版対話型読書力テスト」である。

（２）対話型評価法のテスターの養成

上記（１）のツールを実際に使って児童の言語能力を評価することのできる人材育成を行った。そのワークショップが、計 11 回行われているが、うち３回は大阪で開催し、そこで使用する評価ガイド、評価ツールの印刷費等を支出して支援した。

具体的には、「多言語対話型評価法(会話力・読書力)指導者養成ワークシップ」　第６回 (2011.8.3-5) 於：大阪府 PiaNPO、講師　中島和子・櫻井千穂；第８回（2012.3.26-28）於：大阪府教育センター講師　中島和子・櫻井千穂；第 11 回（2013.3.27-29）於：大阪府教育センター講師 中島和子・櫻井千穂である。毎回、大阪府下の教員優先枠と一般枠で計４０名の参加者があった。

（３）中国ルーツの児童の２言語能力の傾向

のべ７７名の日本語母語児童と中国ルーツの非母語児童に日本語テストを受けてもらい、うち４４名の中国ルーツ児童に中国語でのテストも受けてもらった。

中国ルーツの児童は、多くは日本語のほうが優勢で、中国語はあまり保持伸長できていない傾向がみられた。児童が日本生まれか、途中編入か、それは何歳の時か、母国で学校に通ったことがあるか、といった要因と、家庭での母語（中国語）使用状況や保護者の意識等によって、母語・継承語である中国語の保持レベルは様々である。中国語がわからないからと、中国語によるテストが実施できなかった「日本語モノリンガルに近い」児童、中国語能力が口頭表現にとどまり、読み書きはできないが、中国語で会話テストを受けることができた「会話型バイリンガル」と、自分が話す時は日本語になってしまう「聴解型バイリンガル」の児童、そしてごく少数であるが中国語で読書力調査もできた「バランス型バイリンガル」に分けられる。

教員が「この子は中国語の方はできそう」だと感覚的に判断していたものが、対話して両言語のテストをしてみると、たとえ語彙は習得していても、自分の思いを中国語でもうまく説明できないといったケースが多いことがわかった。

（４）対話型読書力評価の魅力

本調査で使った対話型読書力評価では、児童が自分で「読める」と納得して選んだレベルの本を、最後まで読み切ってから再話し、質問に答えるのだが、テスターがその子と向き合い、ゆっくりその子のペースで話しを引き出し励ます中で、がんばったことをきちんとほめられた子どもたちは、実施後高い満足感を得ることができる。従来のテストとは異なり子どもたちを読書好きに導ける「教育的評価」であり、調査協力者である児童にとっては「先生との特別の時間」として肯定的に捉えるよう指導されている。この評価ツールと読書プログラムを連動させて、読書指導を進めるきっかけとして教育現場で活用が可能であると考えている。これは母語が何語であるかに関わらない。

（５）言語環境との関わり

今回の調査協力者のうち中国ルーツの児童の保護者に、アンケート調査に協力してもらった。それにより家族の背景、家庭内の言語使用実態、親と子の言語活動（読み書き、読書環境）、保護者の認識と期待といった事柄について答えてもらった。日本生まれで同じ地域に住む児童であっても、一人一人が異なる家庭環境にあり、そのことが子どもの言語生活、言語能力に大きな影響を及ぼしていることがわかった。特に１年生児童にとって就学前の家庭の役割は重要であり、幼・保育園との連携や、保護者へのバイリンガル教育に関する情報提供や意見交換、コミュニケーションの大切さが浮き彫りになった。

（６）今後の継続課題

本研究の終了時に、継続して採択された「平成 24-28 年度　科研費基盤研究（B）課題番号 24320094「外国人児童生徒の複数言語能力の縦断的研究　-何もなくさない日本語教育を目指して-」代表：真嶋潤子」の調査では、本研究で得た児童の２言語能力の１回きりの調査でなく、同じ児童について、組織的に最大限５年間かけて縦断研究として両言語の習得過程を調べることにしている。加えて、言語環境に関する保護者からの情報も収集する。また中国語母語話者の教諭が採用され、保護者とのコミュニケーションが目に見えて改善されたことと、教室での児童への指導に母語を活用することの影響など、興味深い結果が期待できると考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

① 真嶋潤子（2012）「日本の公立小学校に学ぶ中国ルーツの児童の二言語の能力評価 -「何もなくさない日本語教育」のための基礎研究-」『平成２１－２３年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書　課題番号 21610010 代表：真嶋潤子　日本語母語児童への国語教育と非母語児童への日本語教育を言語環境から構築する試み』査読無 pp. 19-42.

② 中島和子(2012)「定住二世児の継承語と日本語の関係とその評価」『平成２１－２３年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書　課題番号 21610010 代表：真嶋潤子 日本語母語児童への国語教育と非母語児童への日本語教育を言語環境から構築する試み』査読無　pp. 43-55.

③ 櫻井千穂・孫成志・真嶋潤子（2012）「ある日本生まれの中国ルーツ児童の二言語能力変化と可能性に関する実態報告」『平成２１－２３年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書　課題番号 21610010 代表：真嶋潤子　日本語母語児童への国語教育と非母語児童への日本語教育を言語環境から構築する試み』査読無　pp. 56-66.

④ 友沢昭江（2012）「言語環境調査から見えるもの」『平成２１－２３年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書　課題番号 21610010 代表：真嶋潤子　日本語母語児童への国語教育と非母語児童への日本語教育を言語環境から構築する試み』査読無 pp. 91-119.

⑤ 真嶋潤子・中島和子・友沢昭江・上出仁美・櫻井千穂・ウリガ・孫成志（2011）「日本語と母語の習得研究」修剛他編『世界日本語教育研究大会―異文化コミュニケーションのための日本語教育』高等教育出版社（北京）査読無　pp. 69-81.

⑥ 真嶋潤子・友沢昭江・上出仁美・菊川寛仁・朴錦花（2010）「子どものことばの力を考慮に入れた言語教育政策提言のための基礎研究―日本語母語児童と非母語話者児童の日本語力・母語力の評価テスト―＜中間発表＞」『日本言語政策学会第 12 回大会予稿集』査読有　日本言語政策学会 pp. 42-45.

⑦ 真嶋潤子・安野勝美・沖汐守彦（2010）「大阪府および兵庫県の外国人児童・生徒の母語教育」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』査読無　第６号 pp. 112-120

⑧ 真嶋潤子（2009）「外国人児童生徒への母語教育支援の重要性について―兵庫県の

母語教育支援事業に関わって―」兵庫県教育委員会事務局人権教育課・母語支援教育センター校等連絡会『新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践報告書』査読無　pp.38-43.

⑨　真嶋潤子（2009）「日本語を母語としない（外国人の）子どもの母語維持教育―言語権の観点から―」『人権年報』35 号 桃山学院大学人権問題研究会 査読無　pp.53-64.

〔学会発表〕（計１２件）

①　中島和子・櫻井千穂（2012）＜OBC・ 多言語対話型評価ワークショップ講師＞「多文化多言語環境に育つ子ども（CLD 児）の母語力・日本語力の育成：多言語対話型評価法テスター・指導者養成ワークショップ」国際基督教大学教育研究所、大阪府在日外国人教育研究協議会、こども科学研究費補助（代表：真嶋潤子)、「継承語データベース」科学研究費補助金（代表：中島和子）共催（2012 年 3 月 26 - 28 日　於：大阪府教育センター）

②　真嶋潤子・中島和子・友沢昭江・上出仁美・櫻井千穂・乌日嘎・孫成志（2011）「日本語と母語の習得研究―日本の公立小学校に学ぶ中国ルーツの児童の言語能力―」2011 年世界日本語教育研究大会（2011 年 8 月 於：天津外国語大学（中国））

③　中島和子･櫻井千穂（2011）＜OBC/DRA ワークショップ講師＞「外国人児童生徒の日本語力・母語力の育成：OBC（会話力）／B-DRA（読書力）実践ワークショップ」「継承語データベース」科学研究費補助金（代表：中島和子)、こども科学研究費補助（代表：真嶋潤子)、大阪府外国人教育研究協議会、NPO おおさかこども多文化センター共催（2011 年 8 月 3 - 5 日　於：ピア NPO）

④　中島和子（2011）「多文化・多言語背景のこどもの学力を高めるために教師ができること―母語･継承語との関わりで―」北山本小学校校内研修･八尾市市外教（2011 年 7 月 26 日　於：北本山小学校）

⑤　中島和子（2011）「カミンズ教授との出会い―日本の年少者言語教育と母語の重要性」ユネスコ国際母語デー記念学術講演会（2011 年 2 月 19 日　於：大阪大学吹田キャンパスコンベンション MO ホール）

⑥　真嶋潤子・友沢昭江・上出仁美・朴錦花（2010）＜招待講演＞「日本語指導のためのワークショップ―子どものことば（日本語・母語）の力を評価・把握することと日本語指導を考える―」大阪府教育センター平成 22 年度日本語指導者研究協議会 第 1 回・第 2 回（2010 年 8 月 11 日　於：大阪府教育センター）

⑦　友沢昭江（2010）＜招待講演＞「帰国・渡日生徒の言語教育について―小・中・高校・大学までの連携を考える」日本語教育学校支援事業平成 22 年度日本語指導担当教員研修、主催：大阪府教育委員会（2010 年 7 月 23 日　於：大阪府立長吉高等学校）

⑧　友沢昭江（2010）＜招待講演＞「移動する子どもの言語教育―日本型の移民社会の可能性との関連において」多文化関係学会関西支部夏季研究集会（および異文化コミュニケーション学会関西支部合同研究会）（2010 年 7 月 10 日　於：龍谷大学梅田キャンパス）

⑨　真嶋潤子・友沢昭江・上出仁美・菊川寛仁・朴錦花（2010）＜パネル発表＞「子どものことばの力を考慮に入れた言語教育政策提言のための基礎研究―日本語母語児童と非母語話者児童の日本語力・母語力の評価テスト＜中間発表＞―」日本言語政策学会第 12 回大会（2010 年 6 月 20 日　於：関西大学）

⑩　真嶋潤子（2009）＜講演＞「外国人児童生徒への日本語教育と母語教育」兵庫県教育委員会主催『ひょうご・ヒューマンフェスティバル 2009 in かこがわ』「子ども多文化共生教育フォーラム」（2009 年８月８日　於：加古川市民会館）

⑪　中島和子（2009）＜基調講演＞「移民社会と子どものための言語政策―カナダ・アメリカの事例を踏まえて」日本言語政策学会第 11 回大会（2009 年 6 月 13 日　於：昭和女子大学）

⑫　真嶋潤子（2009）＜口頭発表＞「外国人児童生徒への言語教育政策 大阪府の国内的・国際的位置づけ」言語政策学会関西地区研究例会（2009 年 5 月 16 日　於：関西大学）

〔その他〕

ホームページ等

http://majimajunko.sakura.ne.jp/bukosite/home.html

大阪大学機関リポジトリ（報告書 2012）

http://jairo.nii.ac.jp/0030/00046520/en

６．研究組織

(1)研究代表者

真嶋　潤子（MAJIMA JUNKO）

大阪大学・言語文化研究科・教授

研究者番号：30273733

(2)研究分担者
中島　和子（NAKAJIMA KAZUKO）
トロント大学・名誉教授
研究者番号：70351161

友沢　昭江（TOMOZAWA AKIE）
桃山学院大学・国際教養学部・教授
研究者番号：10149643

(3)連携研究者
無し

(4)研究協力者
清水　政明（SHIMIZU MASAAKI）
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：10314262

上出　仁美（KAMIDE HITOMI）
大阪府八尾市立小学校・教諭

櫻井　千穂(SAKURAI CHIHO)
専修大学・国際交流センター・非常勤講師

ウリガ(WURIGA)
大阪大学大学院言語文化研究科・
博士後期課程

孫　成志(SON SEISHI)
大阪大学大学院言語文化研究科・
博士後期課程

近藤　美佳（KONDO MIKA）
京都大学学術情報メディアセンター・
研究生